

救援活動はど真ん中に行くことが重要

—情報通信は今後利用を一層促進する—

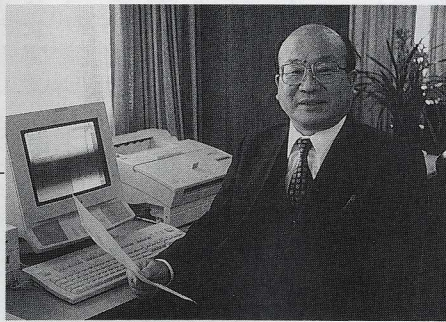
久しぶりにインタビューの再開です。今回は阪神大震災に対する広大の対応や災害時に威力を発揮したといわれるパソコン通信について、原田学長にお聞きしました。聞き手は難波広報委員会副委員長。

広報委員 〓 今回の震災では広大の迅速な救援活動が目立ちましたが、その辺の事情をお聞かせください。

学長 〓 十九日(木)に、神戸大学からの要請で、医学部から陸路で救援物資を送ったが、パトカー先導でも思うようにならなかった。二十日(金)に文部省に行く用があったので、その際、船を出すことの了解をとりつけておいた。

二十一日(土)に体育会の結会があり、出席したところ、学生からボランティアで救援に行きたいという声があり、腹が決まった。

月曜に豊潮丸を出すという予定で、すぐに郷船長の了解をとり、二十二日の日曜日に学生部長をはじめ学生部の職員などに出てきてもらい、救援物資の調達や学生十六名を含む二十三名の救援隊の編成を行った。OBの新庄味噌にも協力をねがった。船を使うというアイデアはどこから出たのですか？



ロシアのキエフから届いたばかりの電子メールのハードコピーを手にして

陸路がダメだというのは分かっていた。神戸商船大学の被害がひどく、六百人の市民が避難しているという情報も入っていた。船ならすぐにそこに医療班を、被災地のど真ん中に送れる。現地の行政機能が麻痺しているのだから、それが一番役立つと思った。豊潮丸は前に見学しており、郷船長の人柄もよく知っていた。だいたい魚の耳石の標本集めに、あの船に乗って南シナ海にでも行ってみたいとかねがね思っていたくらいだ。

試験前の時期に学生のボランティアがよく集まりましたね。合計三十一人が行ってくれた。行った学生は授業は出席扱いにしても良かったが、よく行ってくれたと思う。学生にとつてこういう活動は

もっとも教育的効果がある、と考えた。帰ってきた学生の中には、私にお礼を言いに来た者もいる。今の学生は軟弱だというが、今回の活動を見て、自分のやるべき仕事を見つけると立派に対処する能力があることが分かり、感銘を受けた。医療班もよくやってくれた。船長の機転で、防波堤にバックで接岸し、人員や物資を直ちに陸揚げできた。被災地のど真ん中に救援物資と宿泊設備、風

呂やシャワーの設備のある船を乗りつけたのだから、効果があった。ある意味で今回の措置はトップダウンで、学長の独断専行だという批判はありませんでしたか？

二十四日の部局長連絡会議で、「会議を開いて皆で相談していたら、政府のようになるから」と説明したら、みんな大笑いして承してもらえた。事後承認いただいて感謝している。

今回の震災で、通信の重要性が再認識され、パソコン通信が大いに役立ったようですが、大学として情報通信をどう考えておられますか？

船には船舶電話があり、常に大学とコンタクトがとれた。私も学長室と自宅にパソコンを置き、INTERNETで被災の状況をモニターしていた。昨日もロシアに電子メールを送り、その返事が今来たところだ。HINETは基盤整備が終わったので、今後は会議通知などはこれで流すようにする必要がある。またシラバスも理学部のフォーマットに基づいて、全学部、全教官の授業概要を公開することで、部局長の合意を得ている。

学生用の端末もどんどん増やしていく予定だが、今からはこれが使えないとどうにもならないので、学生諸君も自分でノートパソコンをかうなど、時代を先取りする努力をして欲しい。